# 論文審査の結果の要旨

論文提出者　　大澤聡

大澤聡氏の論文は二部九章からなり、一九二〇年代後半から三〇年代中盤までの批評ジャーナリズムの分析を行っている。批評ジャーナリズムとは、活字メディアにおける、商業化された論壇と文壇での言説活動を指している。

第一部では、批評ジャーナリズムにおけるジャンルの特徴が分析される。第一章では「論壇時評」という月刊雑誌と新聞における、言論状況を整理する言説の誕生と推移についてまとめられ、第二章では「合評会」から「座談会」への推移を中心に討議的空間の成立が論じられた。第三章では普通選挙法の実施に伴う内閣交代をめぐる「人物評論」が論じられ、第四章では、「文芸時評」における文壇内部の読者と一般読者との関係が問題化された。第五章では『経済往来』という雑誌における編集意図と読者との誌面構成の相互関係が分析されている。かくして第一部において、一九二〇年代から三〇年代の活字メディア環境の全体像が明らかにされた。

第二部は、個別の著者のテクストがどのように流通したのかに焦点があてられる。第六章では小林秀雄と大宅壮一、第七章では伊藤静雄の諸作品と保田與重郎の批評、第八章では船山信一と三木清とを対比的に論じ、論壇における中心と周縁の相互関係の在り方を浮かびあがらせている。

そして終章では、大衆消費社会が成立しつつあった一九二〇年代から三〇年代におけるジャーナリズムとアカデミズムの相互関係を明らかにすることで、雑誌メディアが同時代において実現しようとしていた、知の総合の在り方を明らかにし、多領域の批評言語が交錯される論の様態を詳述してまとめとした。

大澤氏の論文は、論壇と文壇という近代日本で形成された文学場において働いていたいくつかの重要な力関係を浮き彫りにすることに成功している。第一は、時評、合評会、座談会という雑誌媒体での批評様式が生み出した独自の討議的空間と、そこで行われた論争の加速化である。第二に文壇や論壇内部における人間関係や勢力構図と一般読者との関心とをつなぐ、固有名消費という様態であった。第三に、一時代において有名性の頂点にあ

った文壇や論壇の中心人物と、同時代の周縁的な伴走者との相互言及と相互変革の動態である。こうした三つの特徴を数多くの雑誌メディアを詳細に分析することで、大澤氏は当時の知的ジャーナリズムの生成過程を、アカデミズムとジャーナリズムの相互作用を含めてこれまでにない形で正確に描き出した。これは、この論文が複数の思想と言説が力動的に交錯する場を意識的に捉えようとした着眼の成果である。

一九二〇年代から三〇年代の日本の雑誌メディアにおける言説の配置を分析した本論文について、第一部と第二部の論じ方のちがいによる一貫性の問題、活字メディアをめぐる状況論なのか個別の批評家をめぐる議論なのかといった論文の統一性について提出資格審査の段階で審査員からの批判が提出されていたが、短期間において理論的な整合性がつけられたという評価がなされた。しかし、第一部と第二部を結合する、より統合的な論理が示されてもいいはずだという指摘もなされた。

しかし、一九二〇年代から三〇年代にかけての日本の雑誌ジャーナリズムについての、包括的な研究として、きわめて重要な成果をあげており、文学研究にとどまらず、社会学的視点もふまえられた総合的なとらえ方を示したとして、本論文が博士（学術）の学位を受けるにふさわしいものと、審査委員会全員が判断するにいたった。